

ダンスの授業に対する印象と学習意欲の変容：I大学の授業を事例にして

Impression and Learning Motivation Change of Dance Class : A Case Study of a Class of a University

次世代教育学部こども発達学科

川瀬 雅

KAWASE, Miyabi

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

Abstract : In this study, we investigated the impression and the motivation that the students had for dance or dance class, taking the class of dance in the university as a case. In survey 1, we investigated the impressions of dance or dance classes three times and explored changes in the classroom using five methods. By experiencing dance classes, I was able to reduce my poor sense of dance and make dance fun, but I didn't get rid of the anxiety of dance coaching. In survey 2, we asked for an answer describing the image to dance class. In the first description, the "Anxiety of class practice" stood out, but by experiencing dance classes, the reality of anxiety became clear, and "child and student relations anxiety" emerged. The third statement confirmed that the students themselves could change the image of the dance class by having fun. In survey 3, we asked for a descriptive answer to what we expect from the class. As a result, it became clear that the students came to seek difficult technology toward the end of the class. This survey in order to remove the "difficult" consciousness of the students from the dance class and to motivate them to learn, students must be able to acquire basic skills from the first class several times, and allow them to "dance". It has become clear that students need to transform the image of the "difficult dance" they envision.

キーワード : Teacher Training Course, Dance Class, Learning Motivation

I. 緒言

本稿の目的は、授業履修者がダンスに対して抱いている印象と、授業に期待していることを確認し、それらは授業を受けることでどのように変化していくのかを調査することである。ひとつの事例として、大学でのダンス授業履修者の実態履修者がどのような意識で授業に臨んでいるのかを捉えて、履修者の実態に合った指導を行うための課題を明らかにする。

平成20年告示中学校学習指導要領において、武道とダンスを含むすべての領域が男女必修になるよう改訂が示された¹。そこで示されたダンスの実施内容はフォークダンス、創作ダンス、現代的なリズムのダンスの3種類である。それぞれに特徴と「ねらい²」があり、これらの「ねらい」を達成するためには、動きを引き出す教師の指導が重要であり、教育現場ではこれらの指導法を確立させることが求められた。しか

し、改定から10年が経過した現在も指導法について議論されている。そのような状況の中で、ダンスに対して「指導不安」を持った教員は多い。授業不安には「生徒の授業参加や動機づけ、授業構成に対する不安」、「教員自身の知識に対する不安」、「教員自身のダンス技術に対する不安」、「生徒のレベルやニーズに対する不安」(2017 山口他)の4因子が挙げられる。このような教育現場の不安を解消するために、大学の教員養成課程においてはダンスの指導力を備えた教師を養成することが求められている(2009 中村)。しかし、大学生においては、学生特有の不安があるだろう。これらを明確にし、学生の不安を取り除く授業を大学の教員養成課程で行うことができれば、実際の教育現場に貢献することができると考える。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象の概要

調査対象としたのはI大学において2018年度前期に次世代教育学部用に開講された「ダンスI（基礎）」の受講生である。「ダンスI（基礎）」次世代教育学部用の授業と対象学生の概要は以下の通りである。

- ・授業名
ダンスI（基礎）
- ・開講時期
2018年4月～7月
授業は全15コマで、1コマ90分で行われる。
- ・授業者
次世代教育学部教員1名
- ・受講生
次世代教育学部教育経営学科27名、こども発達学科16名の合計43名
- ・授業内容
1回目 オリエンテーション
2回目から7回目 現代的なリズムのダンス
8回目 現代的なリズムのダンス実技試験
9回目 フォークダンス
10回目から14回目 創作ダンス
15回目 創作ダンスの実技試験

2. 調査方法と手順

(1) 調査手順

本調査は、「ダンスI（基礎）」の授業第1回目のオリエンテーション時、第8回目の現代的なリズムのダンス実技試験後、第15回目の創作ダンスの実技試験終了後に集団調査法にて実施した。その際、教員からアンケート調査の目的と内容について説明し、「記載内容によって不利益を受けないこと」、「調査で得た個人情報には目的外には使用しないこと」について説明を行い、同意した者が回答した。記入後の質問紙は教員が記入者から直接回収し、質問紙に記入された内容をパソコンに入力して分析を行った。各回の試験を授業時に受けなかった者には、その回の質問紙調査を実施しなかった。

(2) 質問紙の作成

全3回行った質問紙調査の項目は以下の通りである。

- ・第1回目オリエンテーション時実施アンケート
- ①性別・学年・大学の所属部活動またはサークル
- ②小学校から高校までの授業以外での運動歴

③以下のダンスに関する印象について、5件法（5＝とてもそう思う～1＝全くそう思わない）で回答を求めた。

- 質問1 ダンスを見ることは楽しい
- 質問2 ダンスをすることは楽しい
- 質問3 ダンスをすることは苦手だ
- 質問4 ダンスの授業は楽しい
- 質問5 ダンスの授業は苦手だ
- 質問6 ダンスへの苦手意識がある
- 質問7 ダンスを教えることは難しそう

④「ダンスを生徒に教えることに対する具体的なイメージ」について記述回答を求めた。

⑤「この授業に期待すること」について記述回答を求めた。

8回目の現代的なリズムのダンス実技試験後は、上記③、④、⑤のみ実施した。15回目の創作ダンスの実技試験終了後は、③、④と、⑤に代わる質問として「この授業のなかでもっと学びたかったこと」を回答させた。

Ⅲ. 結果

1. 回収率と回答者の主な属性

アンケート調査の回収数と回収率は、第1回目のオリエンテーション時43名中41名（95.34%）、第8回目の現代的なリズムのダンス実技試験後43名中40名（93.02%）、第15回目の創作ダンスの実技試験終了後43名中38名（88.37%）だった。

受講者43名のうち、女子学生は21名、男子学生は22名であり、男女の比率に偏りはない。小学校から高校までに授業以外で運動経験のある者は43名（100%）であり、小学校から何らかのスポーツを学校の授業外で経験している者は40名（93.02%）だった。また、受講生の38名（88.37%）が本学で運動系の部活動またはサークルに所属している。受講生のうち、学校授業外でダンスの経験があった者は3名（6.98%）だった。大学入学後も授業外での運動を継続していることから、運動に対しては苦手意識がなく、運動能力が高いが、ダンスは初心者集団だといえる。

2. 調査1：ダンスに関する印象の授業内変化

ダンスに関する印象を5件法で回答させ、その平均と標準偏差を算出した。結果は表1の通りである。まず、質問1から質問3で「ダンスに対する受講生の印象」を確認した。質問1では、多くの受講生がダンス

の授業を経験する前からダンスを見ることに楽しさを見出していることがわかった。授業の最終回に向かってその肯定感が高まり、さらに履修者間の差が小さくなっている。質問2において、第1回目の時点では、ダンスをすることに楽しさを感じている受講生と、そうでない受講生がいたことが標準偏差の数値から考えられる。しかし、授業の最終回には肯定感が高くなり、履修者間で差が小さくなっていることから、多くの受講生は、実際にダンスを経験することでダンスをする楽しさを見出したといえる。質問3では第1回目の授業時ではダンスはかなり苦手であると回答する受講生と、全くそう思わない受講生がいることがわかる。第3回目になってもこの回答の標準偏差は小さくならなかったが、「苦手だ」という意識は全受講生において低くなった。質問2「ダンスをすることは楽しい」に対して質問3「ダンスをすることが苦手だ」の数値が低くないことから、ダンスをすることは楽しいという意識とダンスをすることが苦手だという意識はかならずしも相関するものではないといえる。しかし、質問2「ダンスをすることは楽しい」の肯定感が高くなると質問3「ダンスをすることが苦手だ」の数値が低くなっていることから、「楽しい」と「苦手」は関連している。

次に、質問4と質問5で「ダンスの授業に関する印象」を確認した。質問4において、第1回目の時点で「ダンスの授業は楽しい」と意識している受講生が多く、授業でダンスを経験することでさらに肯定感が高くなり、第3回目ではほとんどの受講生がダンスの授業に対して肯定的な意識を持つようになった。質問5「ダンスの授業は苦手だ」に関しては、第1回目の授業時ではその意識の差が受講者間で大きかったといえる。しかしその差は第3回目に向かって小さくなり、受講者全体のダンスの授業への苦手意識も減少していった。

質問6「ダンスへの苦手意識がある」では、標準偏差の数値が大きいことから、受講者間で意識の差があることがわかる。第3回に向けて数値が減少しているが、漠然と苦手意識を持ったまま授業を終えた受講生もいることが推察される。質問7「ダンスを教えることは難しそう」という印象に対して、第1回目の授業において、ほとんどの受講生が「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。第3回目に向かって減少してはいるが、全く印象が変化しなかった受講生がいることも考えられる。

表1 ダンスに関する印象の授業内変化

調査1	第1回目	第2回目	第3回目
質問1 ダンスを見ることは楽しい	4.45	4.73	4.87
	0.67	0.55	0.41
質問2 ダンスをすることは楽しい	3.98	4.50	4.76
	1.00	0.72	0.43
質問3 ダンスをすることが苦手だ	3.29	3.05	2.68
	1.13	1.18	1.16
質問4 ダンスの授業は楽しい	4.10	4.40	4.68
	0.85	0.67	0.53
質問5 ダンスの授業は苦手だ	2.90	2.88	2.18
	1.27	1.07	0.90
質問6 ダンスへの苦手意識がある	3.36	3.38	2.79
	1.10	1.21	1.07
質問7 ダンスを教えることは難しそう	4.21	4.13	3.87
	0.87	1.04	0.96

3. 調査2：ダンスの授業へのイメージ

次に、「ダンスの授業に対する具体的なイメージとその変化」を確認するため、自由記述を求めた。第1回目、第2回目、第3回目の回答をそれぞれまとめ、テキストマイニングソフトKHCoder（2014 樋口）を用いて分析した。前処理を行った結果、総抽出語数は2,114語で、そのうち異なり語数は326語だった³。記述回答の傾向を探るために対応分析を使用した。その際、最小出現数による語の取捨選択は3に、最小文章数による語の取捨選択は1に設定した。どちらも最大数は設定しなかった。分析の結果は、図1である。

図1を見ると、全体に共通する語では「難しい」、「教える」、「言葉」が目立つ。第1回目の記述から具体的な例をあげると、「まず自分ができないと教えることは不可能だから、かなり難しそう。」、「言葉を言いながら、体を動かして伝えるのが難しそう。」というダンス授業の「難しさ」とそれに対する不安が現れており、「授業実践不安」を抱えていることがわかる。

第2回目では、図1のなかに「嬉しい」、「笑顔」という語が出現した。第2回目の記述から例をあげると、「ダンスを教えることは難しいが、分かってもらえたり、できたりすると嬉しい。教えて良かったなと思える。」、「教えることは難しいかもしれないけれど、教えた後に笑顔で踊ってくれたりすると嬉しいと思いました。」というように、自らがダンスを習得し、できるようになった喜びに加えて、ダンスの授業中のコミュニケーションを通して喜びや楽しさを感じている。また、「恥ずかしい」という語も出現しているが、これは、「教えるのは恥ずかしいと思っていたけど、楽しく踊れば楽しく恥ずかしくないと考えた。」、「先生が堂々とダンスをすることで、生徒は恥ずかしがりながらも徐々に慣れてくるから良いと思う。」というように、ダンスを恥ずかしいと思う気持ちに対する解決方法に気付いたことによる。一方で、「よりダン

スの難しさがわかって、自分でいっぱいいなのに教えられるのかなと思った。」「生徒に分かりやすく教えるのは難しいと思ったけど、楽しさを教えるのも大切だと思った。」等、ダンスを経験することで「授業実践不安」の内実が明確になり、「児童・生徒関係不安」も出現している。

第3回目では、「楽しむ」、「変化」という語が出現した。第3回目の記述を確認すると、「イメージは大きく変わった。雰囲気良く、先生が恥ずかしがらずに思いっきり教えると、生徒もみんな思い切って踊ることができたんだと思う。」「とにかく楽しむことを教えれば良かった。初めは苦手だと思ったけど楽しめばいいと思えた。」「変化した。難しく考えなくてもいい。まずは自分が楽しむ。」等、ダンスに対しての意識の変化は、受講者自身が「楽しい」と感じることで生じることがわかる。

4. 調査3：ダンスの授業への期待

ダンスの授業に期待していることと、その変化を確認するため、自由記述を求めた。第1回目、第2回目、第3回目の回答をそれぞれまとめ、テキストマイニングソフトKHCoder (2014 樋口) を用いて分析した。前処理を行った結果、総抽出語は第1回目のデータが435語で、そのうち異なり語数は127語だった。第2回目の回答データの総抽出語は374語で、そのうち異なり語数は135語だった。第3回目の

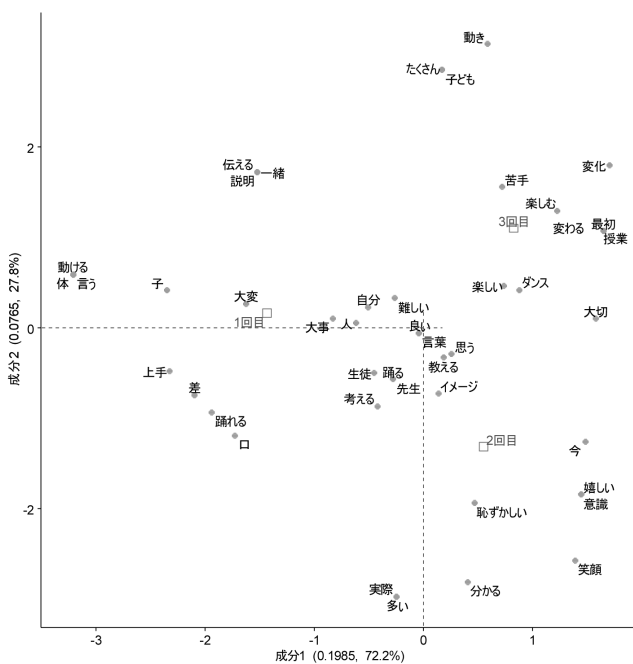


図1 調査2：ダンスの授業に対する具体的なイメージとその変化

回答データの総抽出語数は457語で、そのうち異なり語数は135語だった。記述回答の傾向を探るために階層的クラスター分析を使用し、全てのデータの分析を、出現数による語の取捨選択の最小出現数は2に、文章数による語の取捨選択の最小出現数は1に設定した。どちらも最大出現数と最大文章数は指定しなかった。結果を図2から図4に示す。

図2は第1回目の授業時に受講者が授業に期待していたことを示している。抽出語は、「教える」、「技術」、「踊れる」という語が多かった。この回における回答には「ダンスが苦手なので、苦手意識をなくして楽しみたい。」というような記述が多くあり、ダンスへの苦手意識があることがわかる。また、「少しでもダンスが上手くなって、子どもたちに教えられるレベルになること。」「ダンスの楽しさやダンスの知識。」等の記述があったことから、受講者は、自らのダンスの能力に不安を抱えているため、自らのダンスの技術を向上させることと、指導技術または指導法が身に付くことを期待していたといえる。

図3は第2回目の記述の結果であり、「現代的なリズムのダンス」の試験を終えたあと、受講者が今後の授業に期待していたことを示している。現代的なリズムのダンスを経験したあとに受講者が今後の授業に

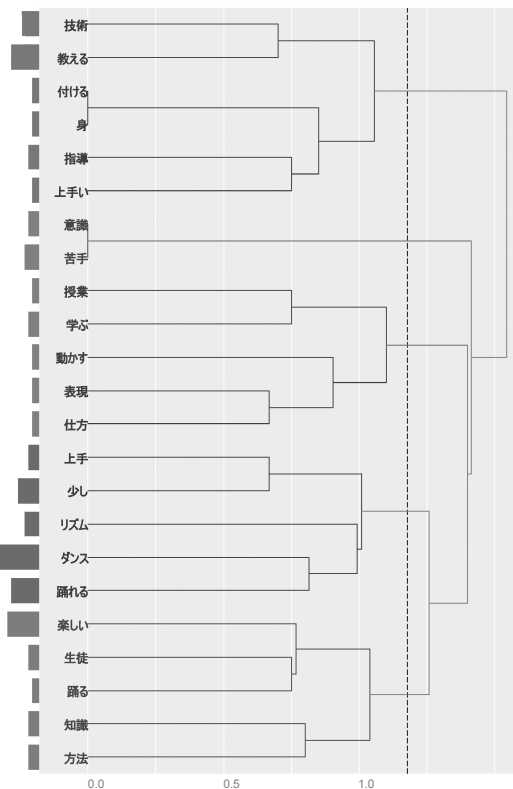


図2：ダンスの授業に期待すること(第1回目の記述)

期待したことは、「技術」だったことがその出現頻度からわかる。記述回答を確認すると、「細かい技術を学びたい。」「新しい技術を身に付けたい。」と記述があったことから、受講生が期待した技術とは、指導技術よりも自らのダンスの技術だといえる。また、「もっと色々な種類のダンスに挑戦したい。授業中にたくさん踊りたい。」「もっと詳しいことまで知りたい。」等の記述があったことから、「現代的なリズムのダンス」の試験が終了した時点で、ダンスへの関心・意欲が高くなり、学習意欲が高くなっていることが明らかになった。

図4は第3回目の記述であり、授業の最終回に「創作ダンス」の試験を終えたあとに、「この授業のなかでもっと学びたかったこと」を示している。この回では、「ダンス」という語の他に「難しい」、「踊る」、「技術」が多く抽出された。回答を確認すると、「楽しむということを学べたので充分です。でももうちょっと難しいのもやってみたかったです。」「もっと難しい技術です。いろんなジャンルをしてみたかったです。」等の「難易度の高い技術」を求める記述があった。この回では、他の回と異なり、「表現」という語が出現しており、「指導の仕方や、もっと表現のできるダンス。表現力を学びたい。」というように、単に「踊れること」に加えて「踊りの見せ方」を探求する意欲がみられた。この「踊りの見せ方」に関する記述はこの一文のみではなく、「基本を学べただけでも良かったけど、もう少し足を細かく動か

したり、キレが出るようにする方法を教わりたかった。」という記述もあった。この回も第2回目と同じように、ダンスへの関心・意欲が高くなり、学習意欲が高くなっていることが明らかになった。授業の最終回において、受講者の関心は基本的な技術・知識の獲得から発展的な技術・知識を獲得することに変化している。

上記をまとめると、第1回目の記述において受講者は、自らのダンスの能力を高めることと、指導技術・指導法が身に付く内容が展開されることを期待していた。第2回目の記述では、ダンスを経験したことを受けて、ダンスの技術をさらに向上させたいという意欲が確認できた。第3回目の記述では、第2回目の記述に引き続き、技術に関する意欲が高まっていたが、単なるダンスの技術のみではなく、ダンスの見せ方の技術にまで関心が及んでいた。ダンスの授業が進むにつれて、受講者の関心・意欲が高まり、発展的な技術・知識を獲得できることを期待するようになることが明らかになった。

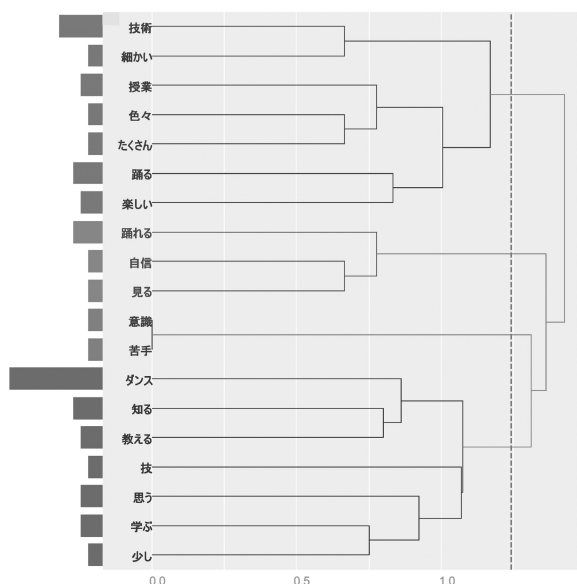


図3：ダンスの授業に期待すること（第2回目の記述）

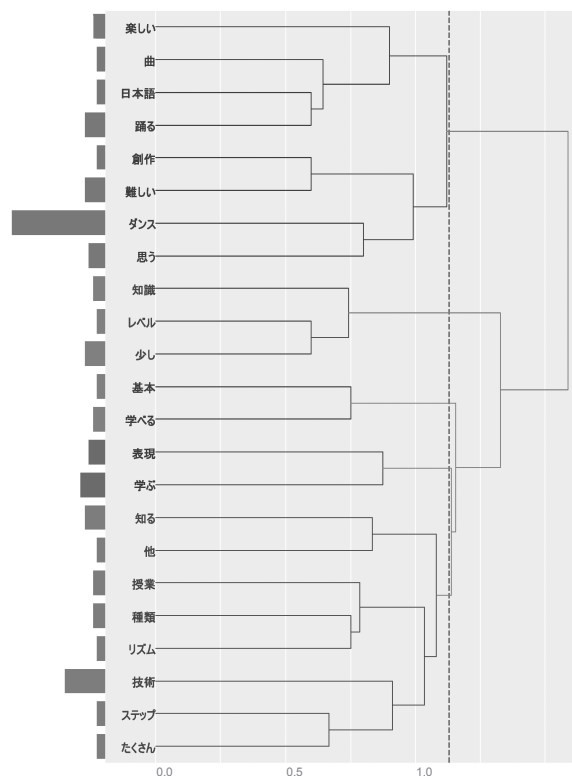


図4：ダンスの授業に期待すること（第3回目の記述）

IV. 考察

1. ダンスの授業に関する各分析の相関

各分析から、本稿で調査を行った集団のダンス授業に対する印象の変容と、それに伴う意欲の変化について述べる。表1「ダンスに関する印象の授業内変化」の各項目では、授業の最終回に向かってダンスとダンスの授業への肯定感が高くなっていった。それは、図1「ダンスの授業に対する具体的なイメージとその変化」から読み取れるように、第1回目の記述時に抱いている「授業実践不安」は、第2回目の記述で「嬉しい」、「笑顔」という語が出現したように、自らがダンスの技術を習得し、できるようになった喜びによってダンスの授業に楽しさを感じるようになることで薄れていくといえる。しかし実際には「授業実践不安」は解消されておらず、ダンスを経験することで「授業実践不安」の内実が明確になり、「児童・生徒関係不安」が新たに出現した。これにより、表1「ダンスに関する印象の授業内変化」のうち「ダンスを教えることは難しそう」における数値が減少しなかったと考えられる。第3回目の記述時には、ダンス授業に対して受講者自身が「ダンスは楽しい」と感じるためには、「ダンスは難しい」という意識が変化することが必要だと受講者自らが気付く結果になった。第2回の記述を終えた時点で受講生が基礎的なダンスの技術を習得していたことにより、ダンスを楽しみ意識することができ、第2回目の記述以降から第3回目の記述にかけての関心・意欲の向上に繋がったといえる。

2. 今後の課題

本調査により、受講生からダンスの授業に対する「難しい」という意識を取り除き、学習意欲を高めるためには、授業初回から数回のうちに基礎的な技術を習得させ、「踊ることができる」ことを受講生に認めさせることと、受講生が思い描いている「難しいダンス」のイメージを変革させることが必要であることが明らかになった。

ダンスの授業のうち、「現代的なリズムのダンス」においては、「ヒップホップ」というジャンルが取り上げられている⁴が、学習指導要領の目標は「現代的なリズムのダンスでは、リズムの特徴をとらえ、変化とまとまりを付けてリズムに乗って全身で踊ること」(2008 文部科学省)であり、ヒップホップのダンサーのように踊ることが目標ではない。これは中村(2013)も指摘している。またこうした見解の誤りに

ついて、山口は「指導内容の誤った理解が教員のダンス指導不安を助長させている」(2017 山口)と述べている。これはダンス教員のみに限ったことではなく、教員養成課程に所属する学生も同様だといえる。今後は、そのような学生の認識を改めるために、授業の早期段階で学習指導要領を正しく解釈させ、その解釈を普及させることが課題となる。これについては、T大学での事例研究においても示唆されており、「特定の人だけではなく、だれでもいつの間にか踊っているような、また今持っている力で踊れるような内容でダンス授業を構成することが重要である」(朴 2016)と、ダンス授業で取り上げるべき教材の特質について述べている。

今回の受講者のほとんどが「ダンスを経験したことがない」集団であったため、教育要領で定められている3種のダンスを経験させることで15回の授業が終了したことは事実である。また、受講生の多くは、授業中盤からダンスの技術を習得することが主な目的になっていた。しかし、社会的に求められている教師を大学で養成するためには、上で述べてきたようにダンスへの意識を変革させながら「指導法」について触れる機会を設けることが必要であり、これにより学生の抱く不安が取り除かれるといえる。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたっては、環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科井上聡教授と吉澤英里講師には貴重なアドバイスをいただいた。この場をお借りして感謝の意を表する。

【注釈】

- ¹ 保健体育科の授業時間数を現行の90時間から105時間に増やすとともに、中学1・2年生において武道、ダンスを含むすべての領域を男女必修とする(2008 文部科学省)。
- ² フォークダンスは、伝承されてきた日本の「民踊」や外国の「フォークダンス」の踊り方の特徴をとらえ、音楽に合わせて特徴的なステップや動きで踊ることがねらいである。創作ダンスは、多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化を付けて即興的に表現したり、変化のあるひとまとまりの表現ができることがねらいである。現代的なリズムのダンスは、リズムの特徴をとらえ、変化のある動きを組み合わせるリズムに乗って全身で踊ることがねらいである(2008 文部

科学省a)。

- ³ 「子ども」, 「子」, 「生徒」, 「人」など同一のものを指していると思われる語があったが, 記述者の意図を尊重し, 訂正は行わなかった。テキストマイニングは句点によって一文を認識するため, 文末に句点がない記述に関しては句点を加えた。
- ⁴ 「ヒップホップに先生奮闘 中学でダンス必修化」(2012 朝日新聞A), 「ヒップホップなんてやったことがない。技術を高めないと授業にならない。」(2012 朝日新聞B)

【引用・参考文献】

- ・大野木裕明, 宮川充司著「教育実習不安の構造と変化」教育心理学研究44 (4) : 87-95 (1996)
- ・茅野理子著「栃木県学校体育におけるダンス指導の現状と課題についてーダンス必修化に関するアンケート調査からー」宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要36 : 25-32 (2013)
- ・朴京眞著「教員養成課程におけるダンス授業のあり方に関する一考察：T大学の「ダンス実技」の授業を事例に」筑波大学体育系紀要39 : 61-70 (2016)
- ・中村恭子著「日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題」スポーツ社会学研究21 (1) : 37-51 (2013)
- ・西松秀樹著「教師効力感と不安に関する研究」滋賀大学教育学部紀要 教育科学55 : 31-38 (2005)
- ・樋口耕一著「社会調査のための計量テキスト分析ー内容分析の継承と発展を目指してー」ナカニシヤ出版 (2014)
- ・山口莉奈, 正田悠, 鈴木紀子, 阪田真己子著「体育科教員のダンス指導不安の探索的研究」日本教育工学会論文誌 (2017)

【資料】

- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説 保健体育編」東山書房 (2008)
- ・朝日新聞A「ヒップホップに先生奮闘 中学でダンス必修化」朝日新聞2012年3月29日朝刊
- ・朝日新聞B「中学の先生ダンスに奮闘中 授業必修化で教室通いも」朝日新聞2012年5月17日夕刊